

「ソラコレ」

朝、六時。澄んだ空気の中、シャッター音が響く。画面に映る、鮮やかな蒼空・・・。

去年の夏、私はある詩を読んでいて「蒼空」という言葉に出会った。

この言葉はどんな空のことを指しているのだろう。そう思い、辞書で調べてみると

「そうくう〔蒼空〕 あおぞら。 大空。」

と書いてあった。さらに、同じ意味を持つ「碧空」という言葉があることを知った。それだけではない。「蒼穹」「碧落」など、もはや空のことを指しているのかさえ一目ではわからないような言葉もあり、その全てが「あおぞら、大空」という意味だとも知った。

同じ意味の言葉が、どうしてこんなにもたくさんあるのだろう。単に「青空」だけでいいのではないか。不思議に思ってさらに調べてみると、「碧」とは緑がかった青色、深い青色のことで、「蒼」は草の青い色、くすんだ青色のことらしいということがわかった。

しかし、これを知ったことでますます謎が深まった。それならどうしてこの漢字を使うのか。空はこんなにもたくさんの「青」をもらっているということなのか。「あおぞら」という共通点はあるものの、それぞれの言葉は、一つ一つ違う意味をもっているのだろうか。それ以来、色々な空を見てみたい、一つ一つの言葉が表す空を知りたいと思った。

そこで思いついたのが、「空のコレクション」、通称「ソラコレ」を始めることだ。たくさんの空を見る、集める。そうすれば、こんなにもたくさんの言葉が創られた理由が、わかるかもしれないと思ったからだ。

九月五日、私は「ソラコレ」の計画を胸に外に出た。九月とはいえ、ドアを開けた途端に暑苦しい空気が押し寄せてくる、残暑の厳しい日だった。どこからか蝉の声がきこえてくる。家の前に立って空を見上げると、晴れた空が広がっていた。

目の前の空を何と呼べばいいのだろうか。以前なら迷わずに「青空」と答えていただろう。しかしその時の空は、ただ一言「青空」と呼んでしまうにはなんだかもったいないような気がした。清々しい空には薄雲が広がっていて、まるで白いレースでもかけたような優しく淡い色をしている。そんな空を見ると、余計に今の景色をどこかにとどめておきたくなって、持っていた携帯電話のカメラを空に向け、シャッターを切った。画面の中に映る空の範囲なんてたかが知れている。それでも、たった今自分が見た空が手の中に入ったような気がして、胸が高鳴った。

その日から、私の「ソラコレ」が始まった。晴れの日も、どんより曇った日も。雨の日にも、傘を差しながら重く広がる鉛色の空を写した。そして、その日撮った数枚の写真の中から、一枚を選んで保存する。やがてその小さな枠の中の空は、ゆっくりではあったが確実に数を増やしていった。

「ソラコレ」を続けていくうちに、空は季節や時間によって、実に多種多様な表情を見せてくれることに気付いた。日暮れ時の写真には、西日のオレンジの光と東側から迫ってくる夜の色のグラデーション。夜明けの写真には、薄暗い空にまぶしく射し込んでキラキラと輝く朝日。台風が去った後には、磨かれたように雲一つない、吸い込まれそうに青い空。冬のある日には、曇天から舞い散る軟らかな白い雪が写ることもあった。

空は一時も休まず、表情を変え続けている。今、自分が見ている空は、どれももう二度と見ることはできない。「晴れ」「曇り」などのくりはあっても、そのときそのときの空は、それぞれ別のもつたくさんの表情に気付いていなかった。そう思うと、大きな損をしていたように思えてならなかった。こんなにも色彩豊かで、こんなにも美しいものがすぐ近くにあったのだ。

「空を表す言葉の一つ一つの意味を知りたい」と思い「ソラコレ」を始めたが、その答えは今でも分からない。明確な答えは存在しないのではとも思う。私が出会った詩の中の「蒼空」と、今の私が思う「蒼空」が同じ空とは限らない。しかし、その言葉の一つ一つに、空の微妙な違いに対する想いが込められていて、だからこそこれだけたくさんの言葉が創られたのだろう。それぞれの言葉を創った人々は、一体どんな空を見ていたのだろうか。今のよう、いや、もしかしたら今よりも美しい空を、見ていたのではないだろうか。

私が「ソラコレ」を始めてから、約十ヵ月。これまでに、様々な空の色と出会い、その表情を知った。携帯電話の「ソラコレ」フォルダに保存された写真は、今では三百枚を超える。まだ見ぬ空を知るために、私は今日も空に向かってシャッターを切る。